
かつて、恋をした

英華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かつて、恋をした

【Nコード】

N1430B

【作者名】

英華

【あらすじ】

新一は帰らぬ人となったと、新一の両親が私、毛利蘭に告げた。高校最後の秋が終わるころだった。憧れに似た淡い恋が損なわれていく哀しみと、その哀しみのなかで願う大好きな自分。恋愛短編。蘭↓コ哀。

（前書き）

コナンが新一に戻らず、哀とそのままの姿で生きることを選択。成長するコナンの姿と戻らない新一を重ねてしまふ蘭が、新一を立ち切っていこうとする話です。新蘭好きの方は戻られた方が賢明です。間違いなく。

今朝、米花公園の広場に巨大なクリスマスツリーが飾られた、と、親友である鈴木園子が言った。

昨日の夕方、通りがかりに準備しているところに出くわしたという。「今年もすつごくきれいよー。あれは去年より盛大になってるわね。イルミネーションを増やしたって聞いたわ」

今年こそ、いい男をつかまえなきゃ、と園子が勢いづいて言った。

私は、そう、とだけ言った。

そして、泣きたくなっていた。また、この時期が訪れてしまった、と思ったから。

「蘭だったら、またそんな神妙な顔つきしてー？ほら、蘭は彼といけばいいんだから、ねっ」

と、園子は言った。泣きそうになる私を元気づけるように、普段より一段と明るい声で。

まだ、まだ戻らない、と毛利蘭は考えていた。

ゼミの部屋の窓から見える、冬色になった景色をぼんやりと眺めながら。

六年前の、高校一年生の、クリスマス。

私は米花公園のクリスマスツリーを見上げていた。小さいころからずっととなりにいた、幼なじみの工藤新一と一緒に。

毎年十二月になると、米花公園の広場にひときわ大きく生える大木が、美しく飾られたイルミネーションをまとう。

ひっそりと生きているような巨木は、普段ならただの大きな老木でしかない。

でも、年に一度のこの一ヶ月は特別だ。この老木にとっても、自分にとっても。

そして私は言った。大きな願いをこめて。

「来年も一緒に見れたらいいね」と。

「そうだな」

と、新一は短く返事をした。

ぶっきらぼうに。愛想のない声で。いつも通りに交わされる言葉のように。

五年前の、高校二年生のときは、新一は来なかった。

だから、公園のクリスマスツリーは見に行けなかった。それに、新一以外のヒトと行きたくもなかった。

待つて待つて、待ちわびて、それでもやっぱり来ることはなかった。

あらわれない新一のかわりに、江戸川コナンくんがそばにいてくれた。

コナンくんは、新一の失踪と入れ替わるようにしてあらわれた、不思議な子どもだった。

「蘭ねーちゃん、元気だして」

と、私に言っで。あどけない笑顔と、心配そうな顔を混在させながら。

私は新一に似たそのおさない子どもを心配させないように、笑顔をつくって言った。

「大丈夫よ」

と。

新一から一本の電話がはいった。

「ごめん、もう戻らない。だから、もう待つな」

と、だけを私に残して、その電話は切れた。

四年前の、高校最後の秋が終わるころだった。

その数日後、新一の両親が、優作おじさまと有希子おばさまが、突然帰国した。

そして、新一はもう戻らないのだと、私にはっきりと告げた。事件に巻きこまれて、帰らぬ人になったと。

米花公園の広場のツリーが飾られた、その翌日のことだった。

落葉樹の葉っぱはすっかり落ちて、今のこの景色と同じような、冬色の景色が広がっていた。

もし帰ってきたならば、嬉しくて多分大泣きした。彼の腕のなかで。そして、言っただろう。

「ずっと待っていたんだよ」

と。甘えとともに、半ば責めながら。

そこには、きつとはにかんでいる新一がいた。

でも。現実。—— そうすることも許されないのだ。もう、戻ることはないのだから。

涙ひとつ、こぼれ落ちることはなかった。

出てきたのは、

「どうして？」

と、いつまでもあらわれることのない彼を責める言葉ばかりだった。

私と新一の仲を知る人たちは、私を気づかってくれた。そのたびに、大丈夫、と答えた。

本当に、大丈夫だった。自分でも驚くほど。気丈に振舞ったわけではない。

私はこの状況を理解できなかったただけだった。わかりたくもなかったから。

私の頭は、それを拒否した。

私の記憶の中の新一は、じゃあな、と笑顔で駆けていったままなのだから。

新一は帰らない、と告げられて、しばらくしたとき。コナンくんは新一がかつて住んでいた家へと移り住んでいた。訳がわからなかった。

なぜ、新一がいた家なのか。なぜ、新一が死んだといったこのタイミングなのか。

私は引き止めたのに。

強く言い立てて、コナンくんは出ていってしまった。

その年の、クリスマス。

その前の年に、一緒にいてくれたコナンくんも、もう一緒にはいてくれなかった。

私はあのツリーを見に行った。園子と一緒に。

米花公園の広場の、あのツリーの下で、コナンくんに会った。久しぶりだった。

彼のとなりには、コナンくんとよく似た雰囲気の灰原哀ちゃんがいる、

そのまわりではしゃぐ小嶋元太くんと、丸山光彦くんと、吉田歩美

ちゃんがいて。

その三人を見守るようにして、その大きなクリスマスツリーの下で、ふたりはたたずんでいた。

彼らに近寄っていくと、コナンさんと哀ちゃんは淡々と話しこんでいるようだった。

そこには、私の知らないコナンくんがいた。けっして幼くなくて、新一を彷彿させるような、でも私の知っている新一とはまるでちがっていた。

「夢を見たんだよ」

「どんな？」

コナンくんが言い、哀ちゃんが簡潔に聞いた。

「お前とここに来る夢」

コナンくんの回答に、哀ちゃんは小さくため息をついて、そう、で？と言った。

「少しは喜べ」

「ここに来ることは、前から約束してたでしょ？」

「夢にまで見たんだぜ？」

「よっぽど楽しんだったのね。オメデトウ」

「お前はちがうのか？」

感情のこもらない返事に、コナンくんが非難めいて言った。

「夢で私は喜んでいたらどう？」

「実物とは大違いなほどに、嬉々として」

哀ちゃんがふんつとそっぽを向いて、

「ありえないわ」

と言った。そして、

「あるって」

「ないわ」

と、ふたりは言い合いを続ける。

普段から大人びたふたりだという認識はあったものの、ふたりきりの会話を聞くのは珍しいことだった。

素っ気なく、でも言葉遊びのようなその会話は、傍からみれば悦にはいつているようにみえた。

「おかしいよね。あのふたり」

園子がくすくす笑って言った。笑って、

「蘭と新一くんはちがったよね」

と、言った。

私はえ？と小さく聞き返した。不覚な言葉だった。

「だって、蘭は新一くんに、よしよしされてたほうじゃない？あのコ、哀ちゃんだっけ？あのコは対等よねー」

そのとき、ふつと悟った。新一と自分の関係を。

私は多分、一方的に好きだったかもしれない。と。

居なくなる、なんてことがなければ気づかないほどの、淡い恋。憧れのような。

忽然と目の前から消えてしまう状況があって、

私が泣いていることをどこかで知って、新一は泣かせまいと甘やかしてくれただけ。

その昔からそうだった。

泣いている私をなぐさめてくれた。泣かされたら、仕返した、と言っ
て、走って行って。

園子の笑い声にコナンくんが気がついて、あ、蘭ねーちゃん、と言
ってこちらに手を振った。

「クリスマス会だったんでしょ？」

「うん。でももう終わったよ」

蘭が聞き、コナンは軽快に答えた。

「なに言ってるの。片付けが残ってるでしょ」

あなたには手伝う義務があるの。わかってるでしょう？、と、横にいた哀ちゃんがコナンくんの頬を軽くつまんだ。

いてて、とコナンは大げさに言ってみせた。

このふたりはゆうなれば幼なじみで、新一と私のそれと変わらない。けれど、あきらかにちがう。

ふたりはお互いに必要だと、それを確認するように、手を絡ませるようにしっかりと結んでいる。

小学生のそれを見て、ああ、うらやましい、と少しだけ、思ったりもした。

と同時に、その光景は、私にとってむごいものに映った。

初恋の男を失ったばかりの私には、実に残酷でしかない。

しかも。新一によく似たコナンくんの、その様子。

じゃれあいの言葉を口にするふたりの姿がイルミネーションに照らされて、やけに美しかったことを覚えている。

「あ、雪だ」

コナンくんがそう言って、私たちはみな、空を見上げた。

いつもは真っ黒な空で、いちばん強く光る一等星だって町の灯りでよく見えないような空で、

でも、今日はぶ厚い雪雲が低く立ちこめているような、夜なのにうつすらと灰色の空で。

その空から、無数に降り注ぐ、白く輝く雪。

哀ちゃんがぶるつと寒そうにしたのを見て、コナンくんが、帰ろうか、と哀ちゃんに言った。

そうね、と言って、じゃあ、とふたりは寄り添うようにして背中を向けた。

「蘭、私たちも帰ろうか？」

と園子が言った。

「イヤよ」

私は強く言った。自分でもびっくりするくらい、強く。

イヤだった。

帰りたくなかった。ここにいたかった。ここにいて、新一があらわれるのを待っていたかった。

「ちよつと、蘭？」

園子が怪訝そうに私を見ていた。背中を向けて立ち去ったはずのコナンくんと哀ちゃんも、振り返って、私を見ていた。

私はずっと考えていた。疑惑について。

どう考えてもおかしいと考えた。でも、そのたびに払拭された、疑惑。

コナンくんが、イコール新一だという、何度考えたかしのれない、その疑惑。

私は知らず知らず、コナンくんを凝視していた。

「ねえ、ウソでしょ？ 新一は帰ってくるよね？」

泣きたくて、言葉が詰まった。けれど、私の声は荒げることなく、落ちついていた。ささやくように。ひっそりと。

そう言って、ふたりの目に背筋がぞくりと凍った。小学生ふたりの目が自分を見据えていたから。

それは寒さのせいだけではなかった。

ふたりのまわりには、ほかの者の介在を許さない、凜とした空気があった。

コナンさんと一緒に暮らしていた私でさえ、一瞬ひるんでしまうようないな。

あの、あどけない私の知っている幼い顔は、そこになかった。

蘭ねーちゃん、とコナンくんが言った。諭すような声に、私はビクリとした。

「新一にーちゃんは死んだんだよ」

と、静かな口調で言った。

「だから、もう二度と帰ってくることはないんだよ」
と、さらにつけ加えた。

この上ない、残酷な仕打ちだった。ほかの誰かに言われるよりも、辛い言葉だった。

新一の目を思いだした。推理している彼の目が好きだった。

でも。そこに、自分のいる場所はなかった。むしろ、引き止めたかった。行かないで、と言った。

彼女なら、と思った。

新一によく似たコナンくんとなりにいる、コナンくんと同じ雰囲気をもった彼女。あのコなら、ともに歩いていくのだろう、と。

黙って立ちすくむ私をよそに、

「灰原、帰ろう」

と、コナンくんは言った。

いいの？というあきれた顔をした哀ちゃんに、いいから、という代わりにコナンくんはにっこりと返していた。

そして、コナンくんは哀ちゃんを手を絡めたまま歩いていった。

死んだことにして忘れるのか。死んだから忘れるのか。

ふたりが立ち去ったあと、私は園子にそう聞いた。

私の考えていることを、彼女はわかっているのか、わかっているのか、知らない。

でも、私にぽつりと言った。

「忘れないでいいんだよ」
と。

私は泣いた。

今までの、生きてきたなかで、多分、いちばん多く泣いた。

すべての負の感情が溢れだして、止まらなくて。

たかだか十八年という歳月の、今まで過ごしてきた思い出はそれなりにたくさんある。

少なくとも、新一に関することは、世界中の誰よりも多いのだと、自負している。

ばかばかしいこともあった。

楽しいこともあった。嬉しいこともあった。

もう二度と逢うことのない哀しみが胸中を襲ってきて、苦しかった。

心臓が細い細いひもで、ぎゅうと締め上げてるような。

と同時に、なぜか悔しかった。

悔しくて悔しくて、あきらめきれなかった。

涙がでた。おじさまとおばさまに、帰らぬ人となったと聞いたときには出なかった涙が。

零れ落ちる涙は、とどまることを知らないように流れ落ちていった。多分、私の頭のなかで、少しずつ受け入れようとしているのだろう。工藤新一が帰らない、ということ。

私はきつと、そのクリスマスを生涯、忘れることはない。

あれから四年たった。クリスマス。

私は二十二歳になっていた。

私は大学卒業を目の前に控えて、園子と、あのクリスマスツリーの下に訪れた。

そこで、コナンちゃんと哀ちゃんに会った。四年前と同じように。

小学生の面影はなく、大人びた雰囲気はそのままに成長していた。彼らは中学生になっていた。

コナンくんが携帯で話しているところに私は近寄った。

哀ちゃん、と私は呼び、彼女はこちらに顔を向けた。

久しぶりね、と、他愛ない世間話をひと言、ふた言、言ったあとで、私は訊ねた。

「哀ちゃん、コナンくんのこと好き？」

と。私は、その昔から訊ねてみたかったのだ。

「好きよ」

と、哀ちゃんは淀みなく即答した。そして、私を一瞥して、コナンくんがいる方に視線を向けた。

「私が唯一執着しているのが、彼のことなの」

目の前にいるその愛しい人に語りかけるように、彼女は愛し^{いっく}みを持つて言った。

そこにいたのは、ひとりの大人の女性だった。きつぱりと言い切った彼女は、ただ美しかった。

彼女の言葉は身体にゆっくりと染み渡って、私はなぜかほっと安堵した。そして、大丈夫、と思った。

「哀ちゃんなら、大丈夫ね」

私は努めて明るく言った。

たとえば、コナンくんが新一だったとしても。あなたなら、ともに歩んでいると思うから。

「ありがとう」

と、哀ちゃんはやわらかく微笑んで言った。その顔はおだやかでゆったりとして、幸せなのだろう、と思った。

コナンくんが哀ちゃんを連れていったあと、ふと、涙が頬をつたった。

雪が頬に落ちてきたのかと思うような、冷たい涙だった。

となりにいた園子は驚いて、訊ねた。

「涙。どうしたの？」

園子のやさしい声に、ああ、あたたかい、と思った。私は首を軽くふって、視界をゆがませている涙をぬぐった。

「ううん。なんでもないの。昔のことを思いだしただけ」

と言って、笑顔をつくった。園子はわかつているくせに、

「初恋のヒトのこと？」

と聞いて、そう、と私は頷いた。

「初恋がやぶれた瞬間のこと」

と言って、言った自分に笑った。

かつて恋をした。

その相手は忽然と姿を消して、時がたって、帰らぬヒトとなった。それだけのことだ。

その恋が、淡かったのか、濃かったのか、それすらもう記憶にない。ただあるのは、恋をした、という事実。

新一はいまだ戻ることはない。

終わりにした。そう思ってきた。今この瞬間も、終わっている、と思っている。

けれど、どこかで待ち続けているのかもしれない。

私は錯覚をする。

新一によく似たコナンくんが、成長していくのを見て。新一がすぐそこにいるような気がして。

でも。

もう二度と帰ってくるはずがないのに。

新一は死んだのだから――。

「雪だよ」

園子がとなりでひっそりとつぶやくように言った。

「ホワイトクリスマスだね」
と。

ふたりで曇天の空を見上げた。うつすらと灰色の空だった。

降ってくる雪に味も香りもない。ただ冷たいだけ。

今日は手袋を忘れてしまった。

すっかり冷えてしまった手を、ぐっと広げるように伸ばして手のひらを上にした。

冷たい雪が手のひらに落ちて、ゆっくりととろけるように溶けていく。

六年前の、新一といた、最後のクリスマス。

あの日も雪が降っていた。

クリスマスと雪が降る。そのふたつの偶然が重なるだけで、なぜかわくわくどきどきしていた。

特別な日が、さらに大きな特別になったよう。

「そうだね、雪だね」

と、私はぼつりと言った。

ふんわりと舞い降りるように降る雪は、きらきらと光って、きれいだった。

この雪はあしたには溶けて、跡形もなく消えてしまう。

わかっていた。

本当はわかっていた。

たとえ戻ってきたって、そこに自分の居場所がないことも。

単なる幼なじみが、自分のもとに帰るなんてことは、エゴだということも。都合のいい話だということも。

帰らぬ人となって、それを確かめる術をなくした。

コナンくんが新一だったら、と、一縷^{いちろう}の望みを持つてしまうことも。なにもかも、あきらめがつかないだけなのだから。

いつまでも断ち切れない弱い自分。いつまでも想い続ける強い自分。大人になりきれない、そんな自分が、
本当は大嫌い、だった。

「雪の結晶ってさ、繊細なんだぜ」
知ってたか？と、新一が私に言った。

今いる場所とおなじ、この大きなクリスマスツリーの下で。ふたつの偶然が重なった、最後のクリスマス。

どういうこと？、と、聞く私に、新一は教えてくれた。

「少しの空気の汚れや、気の曇りが、結晶の形を乱すんだとさ
そうなんだ、と、私はこたえた。

「今日はどうだろな？」

と言って、新一は空を見上げて、降ってくる雪を仰いだ。

「クリスマスだから、きつと息を呑むくらいきれいなはずよ
と、言つて、私も空を見上げた。

新一は笑った。半ば呆れ顔をして。

「いいよな、お前は。能気なロマンチストで」

なによ、と、口をとがらせた私に、新一は言った。

「今もどこかで事件は起きてるんだぜ？むしろ、こんな特別な日だから起こるんだ」

ほら、すぐその人が、実は邪な気持ちよこしまをもってるかもしれないだろう？

と、まるで、それを心待ちにしているかのような顔をして。

せめて、いま降ってくるこの雪の結晶は、ゆがみのない、美しい形であることを祈った。

クリスマスと雪が重なったこの今日という日が、特別な日であることを祈った。

コナンくんが哀ちゃんを愛したように、哀ちゃんがコナンくんを愛したように、

私もたくさん愛して、たくさん愛されて、ちゃんと生きることが祈った。

そして、新一が突然目の前にあらわれたとしても、

「今、私は恋をしている」

と、胸を張って言えるように、大好きな自分になりたい、と、強く、強く願った。

終。

（後書き）

息抜きの短編です。

またしても切ないお話に仕立ててしまいました。（でも、最後は前向きのつもりっ）

もともと、コナン十周年のドラマで、「らー！ーんっ！」と、言ったセリフが耳障りで、

そのころクリスマスの話を一話、と考えていたところで。

イラつくままに書いた話は、哀ちゃんバージョンの切ない話。

で、9割書いたところで、なにも哀ちゃんが泣くことはない、はたと気づき、蘭バージョンで仕立ててしまいました。

（私は哀ちゃん好きvv）

最後まで、読んでいただいてありがとうございました。

感想いただけると、嬉しいです。受けいられるのか、一抹の不安があつたりするから。（↑意外と弱気）

もちろん、コ哀前提のお話をご承知の上で、です。

では。またお会いしましょう♪ 次こそ連載かな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1430b/>

かつて、恋をした

2010年12月10日22時53分発行